



## 黒死病の記憶：十四世紀ドイツの年代記の記述

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 博光 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00010105">https://doi.org/10.24729/00010105</a>

# 黒死病の記憶

## —14 世紀ドイツの年代記の記述—

佐々木 博光

### 1. ある年代記作家の報告

はじめに 14 世紀中葉にドイツを襲った黒死病にかんするつぎの報告を御覧いただきたい。

ところで、ペストもおこり多くの人びとが死んだ。とくに、海の向こうや沿岸地域、さらにその近郊で。ノアの洪水以来一度も体験したことのないようなペストが襲った。いくつかの国々は完全に無人になってしまい、多くの三段櫂船が海上で商品を積んだまま所有者を失い、舵手もなく発見された。マルセイユの司教はすべての住人と運命をともにした。すべてのドミニコ会士とフランチェスコ会士が住人を二分してそれぞれと死に絶えたごとくに。モンペリエ、ナポリ、その他の国々、諸都市でおこったことを、平然と語るができるものがあるか。教皇座のあったアヴィニョンでも多くの人びとが死に、感染にたいする恐怖から秘蹟を授けられることもなく人びとは息絶え、親は息子の、逆に息子は親の、友人たちは仲間の、下男は主人の世話をしようとはしなかった。どれほど多くの家が空き家になってしまったことか、あとには農産物だけがのこった。しかし、だれひとりとしてそこに立ち入ろうとするものはなかった。書くも恐怖、語るも恐怖である。アーチに囲まれた房で大きな暖炉に火を灯しつづける教皇は、だれが近づこうとすることもお許しにならなかった。このペストは国から国へと移ってゆき、学者たちがいくら多くのことを主張しても、ペストが神の御意志に従ったものだということよりも確かな原因をあげることではできなかった。ペストはむろん今日はこちらに、明日はあちらにといった具合に、年中居座ることもまれではなかった。

これは西南ドイツの年代記作家マティアス・フォン・ノイエンブルクの帝国年代記の一節である<sup>(1)</sup>。彼は 1245 年から始まり 1350 年にいたる帝国年代記をラテン語で執筆した。しかし、すくなくとも彼の記憶のおよぶ時期以降の記述は、彼が主として滞在したと思われるシュトラスブルクや上ライン地方の事件に取材する機会が増えてくる。この一節がいつごろ執筆されたものかは確定できないが、生没年等にかんする個人情報から判断して、彼が実際に黒死病の惨禍に接してこの報告を残したことは間違いない<sup>(2)</sup>。

黒死病にかんする目撃証言はこれに尽きるわけではない。ドイツ語圏においても多数の目撃

証言が得られる。古くから聖界には歴史を記述によって保存する慣行があった。アウグスティヌスの『神の国』やオロシウスの『異教徒改宗の歴史』といった古代の教父の作品に着想を得て、この世の救済にいたる歴史を構想することをめざす世界年代記、神の救済に預かることを宿命づけられたローマ帝国とその後裔の歴史を記録する帝国年代記、修道院や教区の歴史を帝国の出来事と関連づけて記述した修道院・教会年代記のたぐいである。これらの聖職者年代記の製作にはすでに久しい伝統があり、その執筆は聖界の共用語であるラテン語によって営々と積み重ねられてきた。14世紀も半ばを過ぎると歴史を保存する慣行は俗界にも広まり、それぞれの都市を単位とする都市年代記の製作もはじまる。なかにはドイツ語で著される作品もでてくる<sup>(3)</sup>。こうして14世紀中葉の黒死病は各種の年代記のなかで豊富な目撃証言を得ることになった。

冒頭にあげたノイエンブルクの記述はこれら多数の目撃証言のひとつにすぎない。この記述を特にとりあげたのは、分量の点からみても内容の点からみても、それが当時の目撃証言の平均的なあり方であったと考えるからである。ここでは、作者が実際に遭遇したと思われるシュトラスブルクや上ライン地方の状況ではなく、遠くイタリア諸都市や教皇庁の事情に取材している点が注目される。黒死病がヨーロッパ史上の大事件と評価されイメージされてきたわりには、事件に遭遇した同時代人の回想が迫真性や切迫感に欠けることにむしろ驚かされる。ボッカッチョが著した『デカメロン』の冒頭の記述は黒死病の惨禍を伝える同時代史料としてしばしば引用される<sup>(4)</sup>。それと比べるならば、この年代記作家の報告は驚くほど淡白であり、また精彩を欠くものと映ろう。しかし、このような感想を得るのに、なにも当時きつての文筆家におおましねがうにはおよばない。詳細は後述することになるが、そもそも当の年代記作家自身も、同時期のその他の出来事に比して、特段黒死病に大きな関心を払っているわけではないのである。前代未聞のペストにたいする当時の歴史作家の反応は意外とそっけなく、またその記憶は急速に風化した。従来の歴史研究が黒死病の影響、黒死病の歴史上の画期としての意義を強調する傾向にあることを考えるならば、これは意外とさえいえる事実である。

本稿は当時の年代記作家の記述という限られた媒体を介して、黒死病がのこした心性史上の影響を再検討しようとするものである。媒体を限定する以上、そこから得られる結論も限定つきとなることを覚悟しないわけにはいかない。しかし、ここでの考察は別の媒体にかんする研究動向とまったく無縁になされるわけではない。そこで、さしあたり美術や文学の領域における近年の研究動向を整理し、黒死病の心性史上の意義がどのように理解される方向にあるのかをまず検討する。黒死病の衝撃を裏付ける史料を豊富に蔵すると考えられたこれらの領域においても、黒死病の心性史上の影響を過大評価するのを慎む方向に理解が進んでいることが確認される。最後にこのような評価とリンクするかたちで、当時の歴史叙述の領域においても、黒死病の衝撃が意外と大きくはなかったことを確認しようと思う。

## 2. 黒死病と美術・文学

黒死病の画期としての意義をとりわけ高く評価したのは社会経済史的な諸研究であった。一説には当時のヨーロッパの人口の三分の一を奪ったともいわれる黒死病の人口誌上の影響が強調された。人口の全般的な減少がもたらした穀物価格の下落は農村人口の流出にさらに拍車をかけた。いっぽう、手工業製品の価格は相対的に高く、また、人口の減少による都市部の労働力不足も深刻であった。人びとはよりよい働き口をもとめて都市へと殺到した。これらの要因があいまって農村部においては領主制の危機が招来した。黒死病がヨーロッパの人口動態にもたらした変化、そこから生じた社会経済史上、社会史上の構造転換についてはこれまでも比較的良好に議論がなされてきた。しかし、近年はこの分野の研究も黒死病の影響を過大評価することには慎重であるようにみえる。

まず、人口減少、そこから生じたさまざまな帰結が、単に黒死病の随伴現象であるばかりではなく、中世後期の一般的な趨勢であることがこれまでもしばしば指摘されていた<sup>(5)</sup>。中世後期の危機については、黒死病の影響を過大評価することをいましめる動向にくわえて、実際の黒死病の被害を下方修正する動きも近年とみに顕著になりつつある。ドイツ語圏では、たとえばマンフレート・ファゾルトが彼の最新の論考のなかでこの課題と取り組んでいる<sup>(6)</sup>。ファゾルトは病理学的な知見に着想を得て、ヨーロッパのような高緯度地方にそれほど大きなペストの被害がまん延するはずはないという確信から文献史料にアプローチした。彼は南ドイツ諸都市の文書館史料を駆使した最新の研究成果に依拠しながら、実際にはドイツの多くの都市や地域が黒死病の被害を免れたと主張する。こうして彼は人口の減少にかんしてもこれまでの評価よりもかなり低く見積もるのである。人口の減少はすでに黒死病以前から始まっており、黒死病が奪ったと見積もられる人口の減少分は、実際にはその後百年以上かけて達成された減少値であるという。

ファゾルトの議論には、文書館史料を駆使した都市史にかんする最新のモノグラフが黒死病に言及していないことをもって、当該都市が黒死病の被害を免れたとするようないささか乱暴な論証もふくまれている。しかし、それは近年の黒死病研究の趨勢を伝えてあまりある。黒死病の画期としての意義を強調する傾向にあった人口誌研究、社会経済史研究も、黒死病の重大性を過大評価しすぎることには慎重な態度をとり始めているのである。しかし、そこから黒死病が心性史上におよぼした影響も取るに足りないものであったと短絡してはならない。死亡者数の多寡とその事件の心理的なダメージは必ずしも比例するとは限らないからである。死亡者数が低く見積もられたからといって、事件の心理的な打撃までが低く評価されるわけではない。黒死病が当時の人びとの心性におよぼした影響を測るためにはまた別の考察が必要になる。

黒死病が心性史上に残した衝撃を考察するために従来好んでとりあげられたのは造形芸術や文学作品といったジャンルであった。ペストと美術というテーマにかんしては岡田温司氏のすぐれた論考がある。ここでは氏の考察を紹介しながら黒死病が美術史上に残した影響をあとづ

けてみたい<sup>(7)</sup>。岡田氏は近著のなかで「ペストと美術」という問題に一章をさき、近年の研究動向を手際よく整理している。一読してわかることは、近年の美術史研究も黒死病の影響にかんする過大評価を慎む傾向にあるということである。「ペスト以後」を美術史上のひとつの時代区分に高めたのはミラード・ミースの功績であった<sup>(8)</sup>。岡田氏の要約を借りるならば、「まさしくペストを境として、それまでの世俗的で人間的な物語描写は象徴的で儀礼的な表現へ、三次元的な空間と彫塑的なヴォリューム感の表現は金箔を多用した平面的な処理法へ、人物たちの生き生きとした動きや表情は不動の正面観や没个性的で仮面のようにこわばった表情へと急激に変化するという。」<sup>(9)</sup> これこそミースが発見したペスト以前と以後の絵画様式の変化、およびペスト以後の絵画様式の特徴であった。しかし、「ペスト以後」の様式を特徴づけるためにミースが切り札として利用した絵画の製作年代が、実はペスト以前にさかのぼる可能性が高いということが指摘されて久しい。また、ミースの診断する変化の兆しはすでに黒死病以前に表面化していたとみる向きもある。このように、美術史学の領域においても、かつては黒死病の影響と診断されていた絵画様式の特徴を、それ以前にさかのぼる危機の時代の影響と読み替える作業が着々と進んでいるのである。

文学研究においても、ボッカッチョの『デカメロン』やギョーム・ド・マシヨの『ナヴァール王の審判』のような、これまで黒死病の衝撃を伝えると考えられてきた作品の評価に再考を促す指摘もあらわれている<sup>(10)</sup>。歴史家フランティシェク・グラウスは、14世紀の危機的な諸現象を考察した大著のなかで、黒死病の衝撃の大きさを物語ると考えられたこれらの文学作品においても、実は黒死病が作品の主題となっているわけではなく、黒死病は主題に移るための場面設定に一役買っているにすぎないことを指摘する<sup>(11)</sup>。黒死病の影響は文学においても意外と小さいということになる。グラウスの研究は高い評価を受けており、わたし自身も彼の著作から多くを学んでいる。しかし、黒死病と文学の関係にかんする評価においては、わたしはグラウスと意見を異にする。もともと黒死病とは直接関連しない主題を選ぶ文学作品が、主題の背景においてではあるとしても、わざわざ黒死病に言及しているのである。しかも、その分量は決して少ないわけではなく、場面設定のために使われるエピソードのなかではやはり一等抜きんでた役割を果たしている。したがって、文学作品が黒死病を主題として扱っていないことをもって黒死病の文学への影響を低く評価するのは早計にすぎよう。そもそも、黒死病という題材が文学の主題としてなじみやすいテーマかどうかとも問題となろう。門外漢である筆者には容易に判断しがたいのだが、もともとこの題材が文学作品の主題としてなじみにくいものであるならば、それにもかかわらず黒死病に言及がなされるのは、この事件の衝撃がそれだけ大きかったからだと判断してもよいのではなかろうか。このことは先に見た美術作品の考察にも当てはまるように思える。黒死病という題材が美術作品の主題としてなじみやすいものかどうかはまず問われなければならない。この難問に答える用意は筆者にはないが、むしろここでの考察から小括として得られることは、黒死病が本来扱われてしかるべきと考えられる媒体にアプローチする必要があるということである。本来扱われてしかるべき媒体でそれがどのような扱いを受けているかということがまずもって考察されなければならない。このような媒体

としてまず頭に浮かぶのは当時の歴史作品である。これら歴史作品の黒死病にかんする記述に目を向けることがつぎの課題となる。

### 3. 黒死病と歴史叙述

マティアス・フォン・ノイエンブルクの帝国年代記は、彼が主に活動したシュトラスブルクの事件に取材していた。黒死病につづくユダヤ人迫害の記述がその好例で、バーゼル、フライブルク・イム・ブライスガウ、シュトラスブルクの上ライン地方の三都市、とりわけシュトラスブルクの事件が記述の大半をしめる<sup>(1)(2)</sup>。これと比較するとき、黒死病の描写が教皇庁のあったアヴィニョンや地中海沿岸地域を舞台にしていることは意外な感じをうける。シュトラスブルクからはマティアス以外にもうひとり同時代の年代記作家がでている。フリツェ・クロゼナーである。彼はドイツ語でシュトラスブルク市の年代記を執筆した。この作品にはシュトラスブルクの黒死病を題材とする記述がある。つぎにそれを紹介してみたい。

前出の鞭打ち苦行者の一団がシュトラスブルクにやってきた 1349 年には、疫病もはやり大量の死者がでた。被害の甚大さはだれもそれを免れるものがないと思えるほどで、かつて聞いたこともないほどのおびただしい死者がでた。鞭打ち苦行者が入ったところではつねに病気で人が死に、彼らの来訪を免れたところでは疫病も起らなかった。

ペストの被害は実に凄惨であった。毎日各地の教会には七人、八人、九人、十人、またはそれ以上の死体がおかれた。教会がなければ修道院墓地に埋葬され、あるいはそれもなければ救貧用墓地に死体はもちこまれた。死者の数は数えきれないほどになり、教会にあった救貧用の墓地を郊外に移さねばならなくなった。そうしなければ古い墓地はすぐに手狭となり、小さすぎて用をなさなかった。死者はみな一様に腋や脚の付け根に一段盛り上がった腫瘍やこぶができて死んだ。こぶができたなら死は免れなかった。できてから四日目、早ければ三日目、もっと早ければ翌日にも息を引き取った。その日に息絶える人もいた。ペストはつぎからつぎへと犠牲者を求めた。ひとりでも死者をだした家で、犠牲者がひとりだけですむということはめったになかった。よく響きわたる鐘の音でもって死者全員に哀悼がささげられることもあった。大量の死者に共同で哀悼をささげる機会は一週間に 63 回にも及んだ。

この当時、埋葬のために死者を教会に運ぶことのないように、また死者を家のなかに一晩放置することのないように、これらは禁じられた。死者を出したらすぐに埋葬するよう定められたからだ。かつてなら死者が出たら教会に運び、それは朝と相場が決まっていたのだが。貴顕の遺骸を運ぶのは同じ貴顕であり、村人の遺骸を運ぶのはやはり同じ村人であり、手工業者の遺骸を運ぶのは同業者であった。疫病が去ると古いしきたりが再び復活し、できたばかりの慣例は廃棄された。人びとはそれ以外の別のやり方を選んだ。そもそも死者を埋葬するために運ばなければならないとしても、だれも率先してそれをやろうとするものがなかつ

たからだ。でも、貴顕は自分の亡骸が身分違いの人たちに運ばれるのを潔しとしなかったし、自分たちの盟友を埋葬するのにお金を出して人足に運んでもらうのを恥じた。それゆえ、再びそれは禁じられた。そこで、いまやあたらしい習慣もあらわれるところとなった。死者を教会に運ぶときは、みんなが集まれるよう葬られる教会の鐘を鳴らして合図をし、教会から墓までみんなで遺骸を運ぶのであった。

シュトラスブルクでは黒死病が原因で一萬六千人が死んだともいわれるが、ほんとうの死者はそれより少なかった。いっぽう、ほかの都市では腫瘍ができた人のなかにも快癒するものがいて、腫瘍はその患者を離れ別の患者に移った<sup>(13)</sup>。

先に紹介したノイエンプルクの報告とは違い、クローゼナーの記述はシュトラスブルクの事情に密着している。ここでは、この箇所の直前で説明されている鞭打ち苦行者の来訪が疫病のまん延に一役買ったことがはじめにほのめかされる。続いて大ペストの惨状を伝える記述があり、残りの記述の大半では黒死病が原因で生じた死者の埋葬や搬送の習慣の揺らぎが説明されている。ドイツ語でなされる著述は、もとよりシュトラスブルク市民を情報の受け手としてより強く意識していたことをうかがわせる。ノイエンプルクのラテン語の著述と異なり、クローゼナーの目撃証言はより起伏に富む内容となっている。しかし、彼の大ペストにかんする記述も、彼の著述全体のなかでは意外と小さな役割しか与えられていないのである。

クローゼナーのシュトラスブルク年代記は、当時としては標準的であった編年体の記述様式を避けて、主題別の構成を採用している点が大きな特徴である。大ペストの著述がなされる前後の主題は、順にユダヤ人迫害、鞭打ち苦行行<sup>くぎようこう</sup>、ペスト、都市内闘争となっており、それぞれに1349年の事件の記述がふくまれている<sup>(14)</sup>。いま、編集された刊本に表示されている写本中の紙数番号をたよりに、この四つの項目を目次風に編集してみると、つぎのようになる。なお、小見出し自体は史料中に表記されているものをそのまま使っており、括弧内の数字は紙葉の表示である。

ユダヤ人迫害 (41 枚目裏一)

ユダヤ人迫害、再び

ユダヤ人迫害、三たび

鞭打ち苦行行

つぎの鞭打ち苦行行 (一41 枚目裏)

一大鞭打ち苦行行 (41 枚目裏—49 枚目表)

大ペスト (49 枚目表—49 枚目裏)

ペスト (一49 枚目裏)

シュトラスブルクの古い抗争

ミュルンハイム家とツォルン家の抗争

(49 枚目裏—51 枚目裏)

シュトラスブルクの新しい変化

(51 枚目裏—53 枚目表)

一見してわかることは 1349 年の「一大鞭打ち苦行行」の分量が突出しており、「大ペスト」の記述の実に 15 倍もの量をしめていることである。これは作品全体のなかでも異例の分量である。「一大鞭打ち苦行行」にたいする作者の異様な関心と、それを叙述することにたいする並々ならぬ意欲がうかがえる。記述はこの贖罪行のあらましを伝えるだけでは飽き足らず、贖罪者たちが行進中に口ずさんだとされる「鞭打ち苦行歌」や、一行の指導者がおこなった説教をも収録している<sup>(15)</sup>。鞭打ち苦行研究の第一級史料と評される叙述である。

「ユダヤ人迫害」については、1298 年の「リントフライシュ王」のポグロム、1336 年から 1338 年にかけて吹き荒れた「アームレーダー王」のポグロム、そして 1349 年 2 月 14 日のポグロムがこの順序で扱われる。1349 年のポグロムの記述が量的にも質的にも一等群を抜いているのだが、それでも三つあわせて一枚の半面にも満たない<sup>(16)</sup>。しかし、1349 年のシュトラスブルクの政変を記述する「シュトラスブルクの新しい変化」の節が、この政変と連動しておこったユダヤ人迫害をあらためて詳述しているのである<sup>(17)</sup>。当市のユダヤ人の殺害を要求して結集した反市会派の諸勢力にたいして、市会はあくまでもユダヤ人の保護に固執した。反市会派の蜂起によって最高市長と三名の市長が更迭され、財産没収のうえ市外追放の憂き目に遭い、あたらしい市参事会が誕生する。そして、この新参事会のもとでユダヤ人迫害が実行される経緯が描かれている。この記述もふくめて考えると、1349 年のユダヤ人迫害の記述は「大ペスト」の 5 倍近い分量にのぼる。

1349 年はシュトラスブルク史上まれにみる多難の年であった。年代記作者フリッチェ・クローゼナーにとっても、1349 年は特筆すべき年、まさしく画期とよぶにふさわしい年であったに違いない<sup>(18)</sup>。しかし、クローゼナーが 1349 年という年号から黒死病を第一に連想したとは思えない。彼にとって 1349 年とは、なによりもまず一大鞭打ち苦行行のあった年であり、ユダヤ人迫害と連動して都市に政変が起った年であった。黒死病にかんする比較的精彩に富んだ記述をふくむクローゼナーの年代記も、回想される事件の優先順位という観点に立つならば、われわれ現代人の予想を大いに裏切るものである。

黒死病の記憶を訪ねて、同時代人が残した帝国年代記、都市年代記の記述をそれぞれひとつずつ考察した。さらに、同時代の世界年代記からも一例を引いておきたい。とりあげるのはミンデンのドミニコ会士ハインリヒ・フォン・ヘルフォルトが上梓した年代記である。ヘルフォルトの作品は文字通り聖職者が構想した世界年代記であり、特定の地域に密着するものではない。しかし、彼の記憶のおよびうる時期の記述は、彼が主として活動したヴェストファーレン、ザクセン地域の事件に取材するケースが増えてくる。純粋な地域史とはいえないが、時代があ

たらしくなるにつれて地域史の色合いが濃くなることは間違いない<sup>(19)</sup>。黒死病にかんする言及はこの作品のなかに合計三回でてくる。皇帝ルートヴィヒ・デア・バイエルンの治世を扱った 99 章に二回、皇帝カール四世の治世を扱った 100 章に一回である<sup>(20)</sup>。

最初の言及はルートヴィヒ治世第三年にあらわれる。アヴィニョンのドミニコ会士ロベルトゥスが、「30 年後に大ペストが起ることを予言した」という記事がある。聖霊が彼に語ったとされる予言の内容が紹介される。「貪欲と聖職売買を追放しないかぎり、墓地から血が川となって幾筋も流れだすような死を免れまい」。さらに、ルートヴィヒ治世第 33 年に黒死病についても一度ふれることが予告される<sup>(21)</sup>。当該年次の記述には予告通り「疫病」の流行にかんする報告がある。その記述はアヴィニョン、マルセイユ、モンペリエからイタリア諸都市におよぶ広範な地中海沿岸地域のペストにかんする報告から始まっている。その後の惨状を伝える報告は本稿の冒頭で紹介したマティアス・フォン・ノイエンブルクの叙述と重複する部分が多く、年代記作家がペストを記述するさいに参照する手本のような叙述が存在したことをうかがわせる<sup>(22)</sup>。記述の最後になってようやくドイツへのペストの伝播がごく簡単にふれられる。「こうして 1350 年になって、この疫病はドイツとその各地、たとえばヴェストファーレン、ザクセン、メクレンブルク、デンマークなどに伝播した。」そして、オウィディウスの『変身物語』の一節が簡潔に引用されたのち、カール四世治下第三年にもう一度このペストについて再論することが予告される<sup>(23)</sup>。

カール四世治下第三年、すなわち 1350 年の記述は、予告通り「大ペスト」にかんする報告から始まっている。ドイツ全土で起ったペストは多くの地域で辛うじて人口の三分の一だけが生き残れたにすぎないほど凄惨であったとあり、その後に社会層による生存率の違いに話題が移る。そこには、「貴顕、騎士、聖職者のほうが俗人よりも助かる率が高かった」とある<sup>(24)</sup>。それにつづけてオウィディウスの『変身物語』巻七の「アイギナの疫病」の全文が掲載される<sup>(25)</sup>。そして、このような説明方法をとる理由をヘルフォルトはつぎのような解説で締め括るのである。「これでわたしは現下のペストにかんする説明の責めを塞ごう、なぜならいつの時代にもペストとは似たようなものだから。」<sup>(26)</sup> ヘルフォルトの黒死病にかんする記述の分量は、彼の鞭打ち苦行者にかんする記述の分量にはおよばないが、決して少ないとはいえない。分量だけを見るならばユダヤ人迫害よりもその扱いは大きい。しかし、説明を簡略化するための修辭的な引用が目立つばかりで、彼のオリジナルな記述はごく限られた部分しかない。彼も説明しているように、ペストは決して一回限りの事件ではなかった。ヘルフォルトの脳裏にも黒死病が歴史上の画期として去来することはなかったのである。

以上で 14 世紀の半ばごろに書かれた三つの年代記作品をとりあげ、そこにふくまれる黒死病にかんする同時代人の記述を考察した。マティアス・フォン・ノイエンブルクの報告は教皇庁および地中海沿岸地方の状況を伝えるのみで、彼の主たる活動舞台であったシュトラスブルクや上ライン地方の黒死病への言及は皆無であった。いっぽう、シュトラスブルクのもうひとりの年代記作家フリツェ・クローゼナーは、マティアスとは異なり、シュトラスブルクに密着した黒死病の被害状況を伝えていた。最後に、ドミニコ会士ハインリヒ・フォン・ヘルフォ

ルトの世界年代記は、黒死病の記述にさかれる分量は少なくないが、その重要な部分は古典作品の有名な記述をそのまま借用し、それに全面的に依存していた。このような三者三様の記述方針を決定したのはそれぞれの教養水準の違いであったかもしれない。高い学識に恵まれたドミニコ会士は古典の記述にたより、学識の点でそれより一段劣る在俗の聖職者は同時代の先行する記述に模範を仰いだ。古典にも同時代人の作品にも窓口をもたない一番学識の劣る作者が見たまま聞いたままを報告した。いずれにしても、三つの作品のうちで多少なりとも生身のペストの模様を伝えているのはクローゼナーの記述だけである。これだけを見ると、同時代人の黒死病にたいする関心は低かったという印象を拭えない。ここからただちに、黒死病が同時代人びとの心性におよぼした影響は取るに足りないものであったと結論すべきであろうか。この点にかんして、すでに紹介した岡田温司氏の近業が興味深い論点を提供している。岡田氏は、「語り得ぬこと」、「表象し得ぬこと」が、逆にペストのトラウマの大きさを物語る可能性もあることを示唆する<sup>(27)</sup>。同時代人たちは未曾有のペストの被害を眼前にしてただただ立ち尽くすしかなす術がなかったのであろうか。あるいは彼らにとってそれは思い出すのも不快な出来事だったのだろうか。いずれにしてもこの場合には、史料の沈黙は逆に黒死病の衝撃が大きかったということを意味する。重要な指摘である。氏の提言と全方位に取り組むことはもとより筆者の力量を越える。しかし、ここでの歴史叙述にかんする考察から、部分的ではあってもなんらかの解答を用意してみたい。

岡田氏の指摘は単なる黒死病の表象という関心を越え、歴史研究者が叙述史料一般と取り組むさいにも問題となりうる大変重要な提言を含んでいる。しかし、こと黒死病の表象という問題にかんして叙述史料は決して沈黙してはいない。年代記の作者たちは黒死病を同時代史として体験したとしても、それを同時並行で叙述していたわけではない。後から回想しながらそれを叙述するのがふつうであったに違いない。彼らには事件を対象化するだけの時間的な余裕があったはずである。したがって、問題になりうるのは、不快な出来事の記憶を拭い去りたいという動機がなかったかどうかということである。しかし、この場面でこのような記憶の抑圧が働いたようには見えない。すでに見たように、年代記の作者たちは黒死病について決して沈黙していただけてはいないからである。むしろ、彼らが何について語り、何について沈黙したのか、語られる内容の偏りを検討することのほうが重要である。これらの年代記作家たちにはペストにたいする「病理学的な」関心はほぼ完全に欠落している。教皇クレメンス六世の答申に応じて作成されたパリ大学医学部のペストにかんする鑑定をはじめ、ドイツでも同時代人コンラート・フォン・メーゲンベルクの『自然の書』(1348/50年)がペストにかんする「病理学的な」診断にあたるものを含んでいた<sup>(28)</sup>。しかし、これら年代記の作者たちが、ペストにかんする「病理学的な」診断にアクセスした形跡は認められない。彼らの黒死病にたいする目線はあくまでも「歴史的な」ものであった。だからといって、彼らは黒死病の史実全般に関心を示したわけではない。すくなくとも彼らの叙述は黒死病の「事件史的な」側面には寡黙で、それは有名な古典や他の作品からの引用で代用可能なものと考えられた。ここで注目したいのは、黒死病の「事件史的な」側面はオウィディウスの引用で済ませ、それ以上は一顧だにしないハイン

リヒ・フォン・ヘルフォルトが、すでに確認したように、社会層による死亡率の違いにはわざわざ一言している点である。年代記作家は黒死病の社会的な影響には無関心ではなかった。三名の年代記作家のなかで唯一生身の黒死病にかんする記述をのこしたフリッチェ・クローゼナーが、死者の搬送や埋葬の習慣に起った変化にとくに印象深い記述をのこしていたことをここでもう一度想起しておきたい。今流に表現するならば、彼らの黒死病にたいする関心は「事件的」ではなく、あきらかに「文化史的」だったのである。

ペストにかんする同時代テキストの沈黙を指摘する岡田氏は、凶像表現ばかりでなく当時の年代記からも一例を引いている。トゥルネーのサン・マルタン修道院長ジル・リ・ミュイシスの『年代記』がそれである<sup>(29)</sup>。オリジナルが現存する彼の作品は、装飾画が挿入されていることでも知られる<sup>(30)</sup>。ペストについても犠牲者の埋葬場面の挿絵がある<sup>(31)</sup>。ペストにかんする異例に早い凶像証言を含むこの『年代記』も、ごとテキストだけを取り上げるならばペストについて沈黙しているという。しかし、わたしの理解は多少異なる。ミュイシスのテキストは黒死病にかんして決して沈黙してはいないからだ。ミュイシスの叙述には黒死病にかんする解説が二箇所が登場する。1348年までつづく本編の年代記の1348年の項に一回、1349年から1353年までつづく編年誌スタイルの続編の1349年の項に一回の計二回である。ミュイシスは続編でペストによる社会層ごとの死亡率の違いに閑説している。トゥルネーでは、「奇妙なことに死亡率はとりわけ富者や貴顕のあいだで高かった」。黒死病研究のなかでたびたび注目されてきた一節である。黒死病を記録した同時代人の記述のなかには階層ごとの死亡率の問題に言及したものが少なくない。そのなかでミュイシスの発言がひととき異彩を放つのは、彼が富者や貴顕のほうが死亡率が高かったと指摘している点である。他の同時代人は異口同音に貧者の死亡率が高かったと言っている。別の箇所ではミュイシス自身も、「死は広い、ゆとりのある空間よりも、市場の周辺や貧しく狭い路地のほうで頻繁に見られた」と述べている<sup>(32)</sup>。ミュイシスの真意を推し量ることはここでの目的ではないが、貧者の死亡率が高いという世評に反論を加えるために彼がこの一節を用意した可能性が濃厚である。また、ここに端的にあらわれるように、ミュイシスの黒死病にかんする記述も、大方はその「文化史的な」側面に偏しているのである。

以上で黒死病にかんする同時代の年代記作家が残した記録を検討した。年代記作家が事件を記述する姿勢が淡々としているのに驚かされる。彼らの黒死病にかんする記述には終末論的な雰囲気は微塵も感じられない。むしろ、ハインリヒ・フォン・ヘルフォルトなどは、黒死病ではなく鞭打ち苦行者の出現に激しい終末観を覚えた。彼は、「鞭打ち苦行者の烏合の衆が反キリストの到来を予告した」と述べている<sup>(33)</sup>。しかも、彼は鞭打ち苦行者の出現を黒死病にたいする人びとの不安からでた反応とは見ていないのである。黒死病の画期としての意義を強調することに性急であった従来の研究動向に照らすならば、このことは意外に思われるかもしれない。しかし、以上で確認された事実は三名以外の年代記作品にもおしなべて当てはまる。黒死病の画期としての意義を強調するこれまでの理解は、すくなくとも心性史上の影響については修正を要するであろう。黒死病が心性史上におよぼした影響は意外と小さい。むしろ、なぜ黒

死病の心理的な影響がこれほど小さいのかという問いが立てられてしかるべきではなかろうか。この問いを考えるために、すでに確認した黒死病を記録する年代記作家の姿勢、関心の偏りがひとつの手がかりを提供してくれるであろう。

#### 四 風化する記憶

事件を回顧する同時代の年代記作家の記述姿勢には一定の偏りが見られた。彼らはあきらかに黒死病の「事件史的な」側面よりも「文化史的な」側面の記述を優先していたのである。中世年代記の編集方針が、より「事件史的」であるか、それともより「文化史的」であるかを一概に決定することはできない。それは個々の作者の問題関心のあり方によって異なるし、記述される出来事の性格にもよる。一般には両方の関心が混在しているのが普通である。しかし、中世年代記においては、概して「事件史的」な関心のほうがまさっていると考えてよかろう。中世年代記の規準に照らしてみると、黒死病の記述がその「事件史的な」側面に寡黙であることにやはり目を見張らざるをえない。この理由を考えるために、ここでとくに注目したいのはフリッチェ・クローゼナーの『年代記』である。すでに見たように、クローゼナーは主題別の構成という一風変わった編集スタイルを彼の作品に採用した。「ペスト」の項には1349年の「大ペスト」につづいて、1358年および1360年のペストにかんする報告が簡潔ながらある<sup>(34)</sup>。年代記作家が報告するペストがすべて本物のペストであったかどうかは疑わしい。得体の知れない疫病はすべてペストと記録された可能性もなくはない。しかし、ペストが心性史上におよぼした影響を考えるというここでの課題にとって、それが本物のペストであったかどうかは問題ではない。むしろ、それが当時の人たちにペストと感じられたということが重要である。このような観点に立つならば、クローゼナーは生涯すくなくとも二度の「ペスト」を体験したことになる。ドミニコ会士ハインリヒ・フォン・ヘルフォルトは、黒死病の「事件史的な」側面の描写を古典作品の引用で片づける理由を、それが決して一回限りのものではないからだとして説明していた。「ペスト」はクローゼナーの場合には個人的な体験としても一回限りのものではなかったのである。黒死病の記憶は、つぎの「ペスト」、ないしはつぎの「ペスト」にたいする不安によって確実に追い越され、風化していった。事件がくり返す可能性が大きかったがゆえに、黒死病の「事件史的な」側面への関心も希薄にならざるをえなかったのではないか。同時代の年代記作家たちは、黒死病の「事件史的な」側面を、おのれの博識や修辭的な才能を披瀝する場面としか見ていなかったのである。

われわれの年代記作家は1349年という年に一様に重大な意義を認めていた。歴史叙述の歴史においても1349年はやはり画期とよぶにふさわしい年であった。年代記作家たちはこの年に起った事件、ユダヤ人迫害、鞭打ち苦行行、黒死病を三対として一気に記述する傾向があった<sup>(35)</sup>。しかし、彼らが画期とよぶにふさわしい意義を認めた事件は黒死病ではなかった。クローゼナーやヘルフォルトの1349年の記憶は、なによりも鞭打ち苦行行があった年であり、

つぎにユダヤ人迫害の印象がこれにつづいた。ここで扱えなかった彼ら以外の年代記作家の場合には、ユダヤ人迫害の印象が概ね彼らの1349年の記憶を支配しているといっても過言ではない。ユダヤ人迫害がのこしたトラウマの大きさを理解するために、ひとつの例を紹介したい。ケルンには『14、15世紀のケルン編年誌』とよばれる史料群がある。このうちの同時代の編年誌の1349年の項には以下の記述がある。「1349年には鞭打ち苦行者の行進があった。同じ年、聖母被昇天祭の前日に司教ヴァルラムがパリで没した。聖バルトロマイ祭の前日にはケルンのユダヤ人が集団焼身自殺をはかり、死に絶えた。」<sup>(36)</sup> この報告によれば、ケルン大司教ヴァルラムの死去が8月14日、ケルンでユダヤ人迫害が起るのが8月23日だったことになる。一見すると、記述は編年誌のそれらしく感情の起伏を極力抑え、事実の確認に終始しているようにみえる。しかし、ユダヤ人迫害の事実がユダヤ人の集団自決に変えられているのは首をかしげざるをえない。キリスト教徒住民からなんの圧力もなかったのにユダヤ人が集団自決を図ったとは到底考えられない。そこに至る経緯がなにもふれられていないのはやはり気にかかる。記述者はできればこの事件をふれずに避けて通りたかったに違いない。記憶の抑圧がテキストに沈黙を強いる一例をここに認めることができる。ユダヤ人迫害の衝撃は鞭打ち苦行のそれに劣らず鮮烈だったのである。それにもかかわらず、これらの事件は、従来は黒死病研究のなかで黒死病の随伴現象として二次的に言及されるにすぎなかった。これらの事件が心性史上においてもった意義を考えるならば、不当に低い評価であったといえよう。ここまでの考察は、ともすればこれまで黒死病という主題の傘に隠れがちであった鞭打ち苦行やユダヤ人迫害の重大性を改めて問い直すための伏線でもあった。

当時の歴史作品をひも解くかぎり、三対と意識された事件のなかで黒死病の衝撃が一等小さかったという印象をぬぐえない。このことは三つの事件にたいする後世の記憶の風化の速度にも端的にあらわれている。どの事件の記憶も風化の波にさらされたことはいうまでもない。しかし、風化のペースは決して一様ではない。黒死病の記憶の風化がやはり一等速かったように思える。クローゼナーの、主題別構成をとる年代記は、シュトラスブルクについてふたつのペストを報告していた。いわゆる黒死病は「大ペスト」“Das große sterbote”とよばれ、その他のペストと明確な区別がつけられていた<sup>(37)</sup>。しかし、黒死病をそれ以外のペストから際立たせるよび方は、同時代人の記録においても必ずしも一般的であったわけではない。フランクフルトのある編年誌は「1356年の8月ごろ」にフランクフルトを襲ったペストを「大ペスト」“magna pestilencia”と記しているのである。この編年誌は1349年の項でも「世界各地」を襲ったペストをやはり「大ペスト」“pestilencia gravi(s)”と記している<sup>(38)</sup>。ヨハンネス・ハイルの指摘によれば、ふたつの「大ペスト」は別々のものと考えられ、フランクフルトは「世界各地」を襲った最初の「大ペスト」の被害を免れた公算が高い<sup>(39)</sup>。この編年誌の作者は、黒死病とのちにフランクフルトを襲ったペストに決してランクづけを行わず、両者を等価に扱っている。歴史上の唯一無二のペストが「大ペスト」であるように、卑近に起った生身のペストもまた「大ペスト」なのである。いずれにしてもペストの襲来は頻繁であったがために、この編年誌の記者は1349年のペストをもはや好事家的な関心からしか見はしないのである。

黒死病にたいする関心は急速にすたれた。そのことは『教皇クレメンス六世伝』の版ごとの黒死病にかんする記述の変化にもうかがえる。黒死病出来時の教皇クレメンス六世の事績を記した伝記は、バルツィウス編集の歴代アヴィニョン教皇伝のなかに六つの版がある。後世の版になるほど黒死病にかんする記述は簡略になり、いくつかの版からは黒死病にかんする言及すら消えうせている<sup>(40)</sup>。これと似たような変化はケルンの編年誌類にも確認できる。ケルンの当時を伝える叙述史料は乏しく、黒死病にかんしても1350年に事件があったことを簡単に紹介する同時代の編年誌があるにすぎない<sup>(41)</sup>。しかし、ケルンののちの編年誌類からは黒死病の記述が速やかに消失する。1384年で終わるある編年誌は、1349年の三対と評価される事件のうち鞭打ち苦行行とユダヤ人迫害には言及するが、黒死病にはもはや言及していない<sup>(42)</sup>。また、別の編年誌はユダヤ人迫害だけに言及し、鞭打ち苦行行と黒死病の報告を割愛している<sup>(43)</sup>。15世紀末に編集されたある年代記でも、ユダヤ人迫害の報告はあり、鞭打ち苦行行にも簡単な言及がなされるが、黒死病についてはもはや一言もふれられない<sup>(44)</sup>。黒死病の記憶は着実に風化したのである。

## 註

- (1) *Matthias Nuewenburgensis*, in: Boehmer, Johann Friedrich (Hg.), *Fontes rerum Germanicarum. Geschichtsquellen Deutschlands*. Bd. IV., Stuttgart 1968 (ND, 1969), S. 261.
- (2) マティアス・フォン・ノイエンブルクについては、Schnith, Karl, Art. Matthias von Neuenburg, in: *Lexikon des Mittelalters*. Bd. VI., München 1992, S. 404.; Sprandel, Rolf, Studien zu Mathias von Neuenburg, in: Berg, Dieter u. Goetz, Hans-Werner (Hg.), *Historiographia mediaevalis. Studien zur Geschichtsschreibung und Quellenkunde des Mittelalters (Festschrift für Franz-Josef Schmale zum 65. Geburtstag)*, Darmstadt 1988, S. 270—282.
- (3) 中世の歴史叙述については、Grundmann, Herbert, *Geschichtsschreibung im Mittelalter. Gattungen—Epochen—Eigenart*, Göttingen 1978<sup>3</sup>.; Schmale, Franz-Josef, *Funktion und Formen mittelalterlicher Geschichtsschreibung. Eine Einführung. Mit einem Beitrag von Hans-Werner Goetz*, Darmstadt 1985.; Graus, František, Funktionen der spätmittelalterlichen Geschichtsschreibung, in: Patze, Hans (Hg.), *Geschichtsschreibung und Geschichtsbewußtsein im späten Mittelalter (Vorträge und Forschungen, Bd. 31)*, Sigmaringen 1987, S. 11—55.
- (4) 以下の邦訳を参照。ボッカッチョ著 (柏熊達生訳)『デカメロン (上)』筑摩書房、1987年、18頁以下。
- (5) たとえば、服部良久「農村社会の転換」山本茂他編『西洋の歴史〔古代・中世編〕』ミネルヴァ書房、1988年、290—297頁。

- (6) Vasold, Manfred, Die Ausbreitung des Schwarzen Todes in Deutschland nach 1348. Zugleich ein Beitrag zur deutschen Bevölkerungsgeschichte, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 277, 2003, S. 281—308.
- (7) 岡田温司『ミメーシスを超えて—美術史の無意識を問う—』勁草書房、2000年、83—132頁。
- (8) Meiss, Millard, *Painting in Florence & Siena after the Black Death*, Princeton 1951. なお、以下の邦訳を参照した。ミラード・ミース著（中森義宗訳）『ペスト後のイタリア絵画』中央大学出版部、1978年。
- (9) 岡田、前掲書、87頁。
- (10) マシヨールの作品については以下の英訳本を参照。Guillaume de Machaut, *The Judgement of the King of Navarre*, ed. and tr. by Palmer, R. Barton, New York and London 1988.
- (11) Graus, František, *Pest—Geißler—Judenmorde. Das 14. Jahrhundert als Krisenzeit*, Göttingen 1987, S. 34.
- (12) *Matthias.*, S. 261—265.
- (13) von Hegel, Karl (hg.), *Die Chroniken der deutschen Städte vom 14. bis ins 16. Jahrhundert*, Bd. VIII. u. IX., Leipzig 1870 [ND, Göttingen 1961], S. 120f. 以下では、*StChr.* と略す。
- (14) *Ebd.*, S. 103—130. なお、フリッチェ・クローゼナーについては、Schnith, Karl, Art. Cloener, Fritsche, in: *Lexikon des Mittelalters*. Bd. II., München 1983, S. 2170.
- (15) *StChr.*, S. 105—120.
- (16) *Ebd.*, S. 103f.
- (17) *Ebd.*, S. 126—130.
- (18) 歴史叙述の歴史における 1348/49 年の画期としての意義については、Sprandel, Rolf, Geschichtsschreiber in Deutschland 1347—1517, in: Graus, František (Hg.), *Mentalitäten im Mittelalter. Methodische und inhaltliche Probleme (Vorträge und Forschungen*, Bd. 35), Sigmaringen 1987, S. 289—318. ここでは、S. 289f.
- (19) Schumann, Klaus Peter, *Heinrich von Herford. Enzyklopädische Gelehrsamkeit und universalhistorische Konzeption im Dienste dominikanischer Studienbedürfnisse (Quellen und Forschungen zur Kirchen- und Religionsgeschichte*, Bd. 4), Münster 1996, S. 132—143.
- (20) ヘルフォルトの黒死病への言及にかんする考察として、Sprandel, Rolf, Studien zu Heinrich von Herford, in: Althoff, Gerd u. a. (Hg.), *Person und Gemeinschaft im Mittelalter. Karl Schmid zum fünfundsechzigsten Geburtstag*, Sigmaringen 1988, S. 557—571. とくに、S. 563.
- (21) Potthast, August (Hg.), *Liber de rebus memorabilioribus sive Henrici de Hervordia*, Göttingen 1859, S. 233.
- (22) *Ebd.*, S. 273f.

- (23) *Ebd.*, S. 274.
- (24) *Ebd.*, S. 284.
- (25) *Ebd.*, S. 285. オウィディウスの一節にかんしては、以下の邦訳を参照。オウィディウス (中村善也訳) 『変身物語 (上)』岩波書店、1995年<sup>13</sup>、285—289頁。
- (26) *Ebd.*, S. 285.
- (27) 岡田、前掲書、91—95頁。
- (28) パリ大学医学部の鑑定については、さしあたり以下の文献に補遺として収録されたものを参照。Hoeniger, Robert, *Der Schwarze Tod in Deutschland*, Berlin 1882 (ND, 1986), S. 149—156. コンラート・フォン・メーゲンベルクのペストにかんする所見は、Pfeiffer, Franz (Hg.), *Konrad von Megenberg · Das Buch der Natur. Die erste Naturgeschichte in deutscher Sprache*, Stuttgart 1861 (3. ND, Hildesheim · Zürich · New York 1994), S. 106ff. なお、ペストにかんする同時代の「科学的な」理解については、以下の文献を参照。村上陽一郎『ペスト大流行』岩波書店、1983年。
- (29) 岡田、前掲書、94頁。
- (30) ミュイシスの生涯と業績については、Art. Gilles li Muisis, in: *Lexikon des Mittelalters*. Bd IV, München u. Zürich 1989, S. 1454f.
- (31) Polzer, Joseph, Aspects of the Fourteenth-Century Iconography of Death and the Plague, in: William, Daniel (ed.), *The Black Death. The Impact of the Fourteenth-Century Plague*, Binghamton 1982, pp. 107—130. 埋葬場面の挿絵が掲載されているのは、p. 114.
- (32) Lemaître, Henri (ed.), *Chronique et Annales de Gilles le Muisit abbé de Saint-Martin de Tournai (1272—1352)*, Paris 1906, 257f.
- (33) Potthast (Hg.), *a. a. O.*, S. 277.
- (34) *StChr.*, Bd. VIII. u. IX., S. 121.
- (35) 三対にかんする指摘として、Sprandel, *a. a. O.*, S. 563.
- (36) *StChr.*, Bd. XIII, Leipzig 1876 (ND, Göttingen 1968), S. 22 u. 36.
- (37) *StChr.*, Bd. VIII. u. IX., S. 121.
- (38) Froning, R. (Hg.), *Frankfurter Chroniken und annalistische Aufzeichnungen des Mittelalters (Quellen zur Frankfurter Geschichte 1)*, Frankfurt am Main 1884, S. 2f.
- (39) Heil, Johannes, Vorgeschichte und Hintergründe des Frankfurter Pogroms von 1349, in: *Hessisches Jahrbuch für Landesgeschichte* 41, 1991, S. 105—151. ここでは、S. 122. さらに、Vasold, *a. a. O.*, S. 300f.
- (40) Baluzius, Stephanus, *Vitae Papatum Avenionensium*, Tome I., Paris 1912, Vita prima S. 251f.; Secunda vita S. 267f.; Tertia vita S. 284f.; Sexta vita S. 305f. なお、第四、第五版には黒死病にかんする記述自体が欠落している。
- (41) *Cölnner Jahrbücher des 14. und 15. Jahrhunderts*, A u. B, in: *StChr.*, Bd. XIII., S. 23 u. 36.

<sup>(42)</sup> *Annales Agrippinenses A. 1348—1384.*, in: *Monumenta Germaniae Historica. Scriptores*, Bd. 16, (ND., 1994), S. 738. 以下、*MGH SS*と略す。

<sup>(43)</sup> *Notae Colonenses*, in: *MGH. SS*, Bd. 24, (ND., 1975), S. 365.

<sup>(44)</sup> *Koelhoffische Chronik 1499*, in: *StChr.*, Bd. XIV., S. 686.

# Erinnerungen an den Schwarzen Tod, betrachtet aus chronikalischen Beschreibungen in den deutschsprachigen Ländern des späteren 14. Jahrhunderts

**Hiromitsu Sasaki**

Man hält meistens den Schwarzen Tod um die Mitte des 14. Jahrhunderts für ein der epochemachenden Ereignisse der europäischen Geschichte. Der Einfluß des Schwarzen Todes ist aus mentalitätsgeschichtlicher Perspektiv jedoch erstaunlich gering, worauf einige Historiker und Kunsthistoriker schon hingewiesen haben. Um nachzuweisen, daß der Schwarze Tod, mentalitätsgeschichtlich gesehen, keine so epochemachende Rolle spielt, wie man gewöhnlich daran glaubt, habe ich in meiner vorliegenden Arbeit chronikalische Erzählungen zum Schwarzen Tod, geschrieben in den deutschsprachigen Ländern des späteren 14. Jahrhunderts, betrachtet. Daraus geht hervor, daß darin der Schwarze Tod nur von relativmäßig geringer Bedeutung war. Der Strassburger Domherr Matthias von Neuenburg berichtete merkwürdigerweise nur die Katastrophe im mediterranen Raum, gar keine im Reich, worum es in seiner Chronik eigentlich gehen sollte. Der Mindener Dominikaner Heinrich von Herford beschränkte sich andererseits darauf, einen großen Teil seiner Darstellungen zum Schwarzen Tod aus den Ovids klassischen Beschreibungen zur Epidemie zu zitieren. Man kann ihre Beschreibungen zum Schwarzen Tod nicht für so dringend und gespannt halten. Man kann allerdings darin einen Schock des Schwarzen Todes vergeblich suchen. Es ist zunächst danach zu fragen, ob die zeitgenössischen Chronisten wegen des von der Katastrophe hervorgebrachten Traumas vielleicht nicht davon reden konnten. Darauf darf man negativ beantworten. Weil sie Beschreibungen zum Schwarzen Tod anboten, auch wenn in einer bestimmten Weise. Diese orientierten sich an den sogenannten kulturgeschichtlichen Problemen, zum Beispiel wie der unterschiedlichen Sterblichkeitsziffer zwischen Reichen und Armen und dem veränderten Trauerfeiers- und Beerdigungshabitus usw., jedoch niemals an den sogenannten ereignisgeschichtlichen Problemen, wie das Beschreibungen des Strassburger Chronisten Fritsche Closeners typisch beweisen. Die Chronisten bemerkten wenig ereignisgeschichtliche Probleme des Schwarzen Todes, weil für sie, wirklich oder vorstellbar, pestartige Seuche keineswegs einmalig waren. Ich habe zuletzt gezeigt, daß Erinnerungen an den Schwarzen Tod von Ängsten an kommenden Seuchen schon bald während des 14. Jahrhunderts veraltet waren.